

子どもの健康と病気の予防③

— 子どもと新型コロナウイルスワクチン接種 —

小宅医院 小宅民子

新型コロナウイルスワクチンの接種が進み、津久見市でも12歳以上の子どもに接種券が配布されました。子どもへの新型コロナウイルスワクチン接種を検討中の保護者の方も多いと思います。

子どもの新型コロナウイルス感染症は従来株だけでなく変異株においても、多くは無症状ないし軽症であることがわかっています。しかし、新型コロナウイルスは、変異を起こしやすい、変異を繰り返すことにより感染性が強くなる傾向があり、今後も感染拡大が続く、さらに重症化しやすいなどの特徴があります。この状況下で、感染拡大防止の切り札としてワクチン接種が推奨されています。2021年6月、日本小児科学会、日本小児科医会、小児への新型コロナウイルスワクチン接種に対する考え方を提言しています。

子どもへの感染源の多くは周りにいる大人です。子どもを感染から守るためには周囲の大人が免疫を獲得することが重要です。保護者はもちろん子どもに関わる業務従事者（保育士や教師など）のワクチン接種が子どもへの感染機会の軽減につながります。

重篤な基礎疾患（神経疾患、慢性呼吸器疾患、免疫不全症など）のある子どもへのワクチン接種により、新型コロナウイルス感染症の重症化を防ぐことが期待されます。

健康な子どもへのワクチン接種については、メリットとデメリットを本人と保護者が十分に理解することが重要です。主なメリットは感染症予防です。一年以上続く予防対策が、子どもたちの心身の健康に影響を与えています。また、新型コロナウイルス感染症の多くは軽症ですが、まれに重症化することもあります。主なデメリットは副反応です。副反応の多くは接種部位の痛み、だるさ、頭痛、発熱などです。高齢者に比べ年齢の若い人にもやや多いと報告されています。

小児の新型コロナウイルス感染症の特徴やワクチン接種による小児特有の反応などを本人や保護者が十分理解し、接種前・中・後のきめ細やかな対応が必要で、できればかかりつけ医での個別接種が望ましいと考えます。ワクチン接種を希望しない子どもと保護者に対しては、特別扱いされないような十分な配慮が必要です。

子どもへの新型コロナウイルスワクチン接種の5つのポイント

- 津久見市では12歳以上のワクチン接種が開始
- 子どもを感染から守るためには周りの大人のワクチン接種が重要
- 重篤な基礎疾患のある子どもへのワクチン接種により感染症の重症化を防ぐ
- 健康な子どもへのワクチン接種はメリットとデメリットを十分に理解する
- 子どものワクチン接種はかかりつけ医での個別接種が望ましい